

狸 7 狸と物識り = = = 猪・鹿・狸より

貉の皮を狸とまちがえて買った話がある。えらい山の中などで、よくある手だと言うた。板に張って吊るしてあるのを、何も知らぬ町育ちの行商人などが、何の皮だ、なるほどこりゃ狸だねなどと、お愛想のつもりで言うと、ああ狸だ、幾らかにならぬかいなどと、空慌けている。何だこの爺、狸の相場を知らぬのかと、つい、むらむらと欲が出て、狸でその値なら安いものだ。如何にもこんな山の中では、世間の相場は知るまいなど一人極めして、慌てて金を払って担いできた。お前マミ(貉)の皮をかうのかいなどと、途中で話かけられて、ぎょっとしたと言う。貉では狸の皮の十分の一にもならなんだのである。何処から買って来た、ああ、またあいつに欺されたかなどと笑われて、泣き出すものもあったそうである。それでもまだ諦め切れなくて、狩人という狩人の家へ、一々寄って訊いたそうである。幾らでもいいから、そこいらにおいて売っておくれと、投げ出して行くものもあったという。

貉と狸とは見た目ですぐ判ったのであるが、それは狩人の話で、素人には容易に判らなんだと言う。そうかと言うて狩人でも、判らぬ場合もまたあった。

狸だ貉だとさんざん争った末に、村の物識りの処へ担ぎ込んだ話がある。その物識りと言うのが盲目だった。座敷に寝ていてそう言うたそうである。肢にあかぎれがあるかやと、そう聞かれてみたら、如何にも肢の裏にあかぎれがあった。そんなら狸だぞよと、寝ていて見分けたなどと言うた。その変な物識りは〔忠兵衛といって〕一七の年に眼を患って、二〇歳の時には皆目見えなんだそうである。それでいて村のことなら何でも知らぬことはなかった。目が、見えなくても山の地境や地形まで、不思議なほどよく知っていた。何処の山にどんな石のあることまで知っていた。あの人が見えたらと、惜しまぬものはなかったと言う。それでいて晩年はことに気の毒だったそうである。女房に死に別れてから後添えを迎えたが、その女との間に、娘が一人あった。間もなくその女房は恐ろしい癩病が出て、村で作った山の中の小屋で死んだそうである。その後、娘が一三の年に、罪業消滅のためとあって、連れ立って廻国に出たそうである。四国八十八ヶ所から、奥州の塩釜まで廻ったと言う。最後に村に帰った時は、江戸の雉子橋御門の中の長屋で、見えぬと思った従弟に遇って来たと言うて、ひどく喜んでいたのであるが、それから間もなく死んだと言う。その娘も癩病の母を持ったために、可哀相な身の上だった。ひどく親思いの娘だったというが、一三の年から廻国をし通して、どうした事情であったか、一七の年に美濃の岩村で、雪の中に凍えていたと言う。それが廻国の姿であったそうだ。助けられて家へは帰って死んだとの話だが、もう一〇〇年近くも前のことである。